

「フリーター、家を買う。」を読んで

工学部 情報工学科

高橋 良

このとぼけたタイトルからは想像もつかない内容だった。軽く読み進める小説だと思っ  
ていたのだが、実は現代における格差社会と  
家族再生をテーマにしており、登場人物に共  
感したり、一緒に思考したりと、読後感が心地  
よかった。

まず主人公の誠治に感情移入がしやすい。  
彼はやっとの思いで就職した会社を、三ヶ月  
であっさりとやめてしまう。このあたりのい  
きさつはわれわれ現代の若者に共通するところ  
ろは多いと思う。堪え性がないとか、自己中  
心とかさまざまな言い方はあると思うが、  
「ここは俺の居場所じゃない」と叫ぶ誠治の  
思いは、私の心の叫びでもある。いったい、  
自分の本当の居場所はどこなのか、探してき  
迷う者は多い。誠治はフリーターになり、探

し始めるが、フリーター生活の心地よさにい  
つしか甘えてしまいうようになる。  
そんな誠治が、ぬくぬくとした居場所から  
出ざるを得なくなる事件が、家族の中に起こ  
る。近所のいじめを長年受け続けた母親のウ  
ツと妄想である。ここで、いじめとウツが出  
てくるのも、いかにも現代らしい、ウツはい  
まや十人に一人がかかるという、ストレス社  
会ならではの現代病である。地域のつながり  
が希薄になっていく中、これほどのいじめが  
あるのか疑問はあるが、社宅のような閉鎖社  
会では十分に考えることであり、その陰湿  
さは背筋が寒くなるほどである。  
息子はフリーター、母親はウツ、父親は無  
関心となれば家庭が少しずつ壊れていくのが  
定番なのだろうが、この家族には強力な助っ  
人がいた。嫁いだ姉である。私はこの姉なし  
には、家族再生は有り得なかったと思う。長  
年の母の苦しみを分かち合い、主人公を叱咤  
し、家庭を顧みない父にもしっかりと意見を

いい、いいじめの根源である。近所にさらりと  
嫌味を返すことの出来る姉のおかげで、家族  
は少しずつひとつにまとまっていく。  
もちろん誠治の頑張りも、家族再生に一役  
かっている。最初は実入りがいいという理由  
での夜間工事のアルバイトだった。きつい仕  
事ではあるが気のいい仕事仲間にも恵まれ、  
ついにはこの会社への就職を希望するようにな  
る。本当にやりたい仕事は何か、自分の居  
場所はどこなのか、フリーターからの脱却で  
ある。  
しかし父親はブルーカラーの職業への差別  
から反対する。こんなときいつも反発してば  
かりだった誠治は、父親に歩み寄ることを決  
意する。父親を説得する誠治の言葉が心に響  
いた。「俺はあんたを尊敬したいんだよ」両  
親を尊敬する、これは家族再生に最も必要な  
ことではないだろうか。  
建設会社の正社員として就職してから、誠  
治は、最初の会社を三ヶ月で辞めたかつての

姿とは見違えるたくましさを感じさせた。この物語は、フリーターになった主人公が、家を買うまで頑張ったサクセスストーリーである。しかし単純なサクセスストーリーではない。私たちに大きな課題を与えつつ、これからも続いていく物語である。